



5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24



六、唯日累々終は三通之ノ郵便ノ半了不七
郭書り一すり附ハ三列の人性ハ極徳氏ハ終
来年が一てある事ノ幕トニ居し忠功ヲ坐
ありとくとく人牛体字達一て佛へうだ
へすあぐ君利の病とせんきくやう立
実際アヨとくぐく大恩恩道雲居多入明昨ハか
遠風漢ア依て方庵半あゆのくそ転則
半立アアリ附の信函するかどくま内シよ
一冊の書附一金附終一車モカド帳一折のミ也
あうもとつても段文諸縁ノ吉興と諸同とつがよ
交換もあす言下るありまう化尊此男女

新一うすつ井伊明徳元年未六月廿六日
奄死とて近化をもる行年七十七歲陽三十六
年也交生の大和子孫也く七郎の書とはるも
中じ書ハ神祇あじきのとあつりく未世
ノ言生とすりんごもにうさとくめらき
不也ひち手停ニ不滿にてせせゆかふあも
云泰

國果毛経書と同様

一 神人ふきの地ノ氣ニヨリ
清々ぬき女死テ漢のやけニタ
伊勢守朴宣西利生ノキ
援手文と御禮一て符あこゝ
志ゆへ地名よみて夫ともと
もとこうでもとつれノキ
け門のち小朱トヨキ
妻と極てまよ死とのけ女原ノ事
はる功カハシキ
庄多こうろとれてまゆりるモ
お子のまもとゆるモ

十三
母のそばに乳とのまさせ一
吉翁の会合によつてゐる
まことありてあひる様のま
丈夫の又あら病と療法
努力のまへ事あつてあるとまことま
まことま

周易爻辭考一

西漢人圖書

一 极もやうこみの地
援弓圓序下院圓周極流のをめ名徳傳
りて豆氣のあひてあるせ原とぞしてよ
多くらうきうがりてのう。ふがくの扇
ゆりけり。かちのうしててひきふがくと
れをあひてやうくへしがりてすらや
であらううとつとものもとゆゑてわそ
けせば。うがうをあじゆと見て肉を迎全す
いといひまし。まおひくはぬとうくと
うこがう。うじてときう。あつて三儀の云

原又さんへ。ゆとりのいゆういふやあらわせ
びきんとて。おまへらすとこざりて。かわゆとう
にまよひ。下に御時よりて。まよひ
まよひはくつらは三先け生なまめいふ
おととそんをとせ。かわび。まくす。まくさる
し。づく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。

三のねづかうえ

正説書

三



三 憐 娘らを母子で横のやまと
東と一のえもうとまよとおとおれを立ま
ちみ寄と云假泊り。こ女房とのあよびをくゆ
きあよきうのくゆすすとすりしきもづ
いりてれたり。どうしてうぶことれはまちから
がみせむのつろよまくわがわらもあく
がみのむら假泊のあわどとら。くふ少もこ
てやきやうとゑくくよ全般と云假泊のゆ
り行くうにゆつくりえ御り小よりて舟行を
あがくうくとやきとえりばん元
名く。お山乃西服院もと原ノ也。後よめ教
すの牛事わら。こととくかく、ちよむじてま

うじゆくよす。夏の年

三

伊勢守神主沙利生ノ事

ある人福源。ち不下。奥翁も行方。まえ
をほん高。とらきり。亨。主ふに住む。からて不
きやう。きを圓。奥翁もしてうちこう。まえ
ひと人あり。がいをも。ありから。まへゆ
つぐる。孫。すりふき。うらわ。金
冠。神。まほ。御。やとい。あつがく。まくやう。
伝。か。しとあえ。け。しほう。で。ち神。命。八
九。か。さと。御。う。そ。し。す。う。と。あ
らたり。ま。次。の。年。ま。ま。れ。う。ざ。ざ。ん。う。お
と。う。ま。う。死。う。孫。う。と。神。主。の
神。主。の。ゆ。う。あ。う。く。み。ゆ。う。と。う。と。と。と。と。
ま。う。ま。う。三。ざ。ん。ら。の。す。う。と。う。れ。う。り。三。人。乃。子
乃。ふ。れ。し。が。う。く。き。け。き。ち。う。ま。う。一。あ。り。と。て。あ
深。の。ま。う。と。あ。と。う。と。あ。り。と。う。と。人。の。み。か。る。あ
ね。と。今。り。わ。ふ。二。人。の。あ。て。背。一。人。の。う。と。あ。う。
が。今。ふ。わ。う。と。あ。り。と。う。と。あ。り。が。お。う。一。あ。り。と
頬。う。れ。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。
頬。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。
神。主。の。神。主。や。う。う。と。孫。う。す。う。付。う。び。う
ハ。福。源。の。人。あ。れ。う。と。

四

後もあまどお詫して寢わううう

東都江戸新宿町にありてひよすりとぞう安
めり。併易き御えのまをあうせんとくらそと
主へ受けてそのかうまうすう先お詫しきれ
ましとねせふくらむと居てはせよ主お詫しきれ
あえする。主へゆくらうとまし。ばよとすく
あやせしとやもう神。ばらのまうきりが
て言ふよをあああああああああああああ
もくわおうと。あふがりにしてぬれすつまを
けまほ。すからやまえりくいきぬまほ
守とせうんとてなまめうといまくをゆす春
えのゆゑをとやあり。すべて休むけはぐの
がくはとどく。あふまづたうわりくわり
候局のま葉名の町にものびひりせす。ま葉
する男すと。ま葉ようゆ女子とわく。ひめすう
とくづひきう。ちりく療活も。たはかくよと
くうちだらう。けりう。就あまうとれ。うくうで
けひきう。やうくとく極も。今やせんよ
ゆけとく。びじとく。まく。まくらとく。ばくせん
ううきうやう。やうくつとく。まくわんわ。まく
くわんのうのう。ハ。おはとく。まくわんわ。まく

五

高山寺の歌

しゆりやわきをはじめのひいよすみるう男と
わりひつけくわきをひらりかへまきを説く
あきこか今ハこれゆうするくかへとく
かきことえきうおから居てじもんの親より
こうそくすおらが男のねよびうかと
うげくらむりまうかこうとくせうとく
うちとみえかくとけまいか男のまこと
うたはんまくとやうきれぬとくとくをあひ
ゆうやくくねくれ、じしりとたまううるひ
とくしめらく氣よりうてそろ和紙やより
り、もうれあとを日へかけなきててくふゑ
ねあくじやうく音よかあけたわざりければ

あゆうてゆかくまちけく。ゆことせらるる
ふゆうらく立へまわらが男とぞくべう
廢までやのほのミシまで耳乃立きまく
へしきあひようて男の肩とぞくで二人も
うれとぞく。意承たまゆかせやくれうわ
かく。心合はくらむらうとぞくとぞくとぞく
さうとくと馬づれまき

六

東河口。船とふぶの内と守村といふ者あり
がれ村を離れて百姓あり。ばんりうきはうの
を捨て去りのきんとすまえ。うりに運うて行
きえむ。うらうとあるせあつよがりと打立てて



まよやで死をうへてお節分をすすめにあけりこ
う。からうりこひもてうるまううふきをぬへこうい
ゆく。とくよひ入れてもひじるのまことひとく
ら。とがくよすけ。金をばう借りよまをる
のくふく。うそとくよせてもうしくじくよむだみ
死をう。うくわうかねたうふくらはくよまびと
う。とせとふくうき

七 管絃のまつゑうみ

こきてあわうたら。は村といふ。立不あつ。そひ
里う。文宗とつふは仰あう。せふまう。角玉さり
このかうへや。まつゑうみ。うふは仰といつて。せと
ううすけい。立ふまう。まのまう。うひほお

ちふりとる金ひどてゆききとへれうと
たつてそなへりき。ぐりそひて、とあせん
うけりとらうまひがきを連るときとく。
うけへとみとまわざねひのちよはかづ
うかめうきうりて、とよて、とびうとくひの
うれとくやうくち庵のがく柵と施
じめういととのと金とわふあらう猶今
のとくはうとくひうきの年へ年と八
とくややくとく日つりくひとえうおがめ
うれうひうちとくとくとくとくとくとくとくとく
ハ。だけひとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

八
越後のあらば年任とくのあや。高麗使
とて。高麗大領邦の代官也。有ハ善え寺
ノも。あすと吉えもととく。あとく。萬の
あつふとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うきとまく。ああうびりとまくをひてつたま若
さふらとみゆいへうき、けられがのせす。まむを
まし。正がうるいへおひの玉浦、わらむくのす
ゆへすすまへうきりまつめんちへうせうの時も
アラモドコロうきけう。太河ひてうけとまうて
正がみ命ひうら一間ひとてされとし。それま
くはそうとまうのうへ。せくうめへ下と
がさくとまうれば、武をまわらうれ。あこよりて
けい合ひて、大河へまつりそろそとめく。徳意
をはくはうめまひかとめりととく。却てひち
う居らうぐひとめりて、若えうすらそまうけ
まば。まのぬをそのまねをあぐり。若くとだまわ
て、おもてうわしうをとひき。とせ。が
ひこのがくわんかとすやり。あ合と。武をまわら
まをうれうと。まと合をてねく。そへう。ぬ房
めき、がくら。うじとて、要の毛とがく。うく
ひつまくわき、まくはく。ほり。武をまわら。やうこ
まはまうま。あとゆ。うけりやとて。そへう。びと
びとうて、かく。うめく。そへう。ねう。そへう。
達者くよあること。う。達者くよあること。う
あれ。原のあ合のうりく。うちとあう。我父。活
けりうりとて。あと。わうし。うと。活翠。うと。う
。げのうて。活翠。うと。活翠。うと。う
下へたげう。と。うと。うと。吾えのと活翠。うと。う

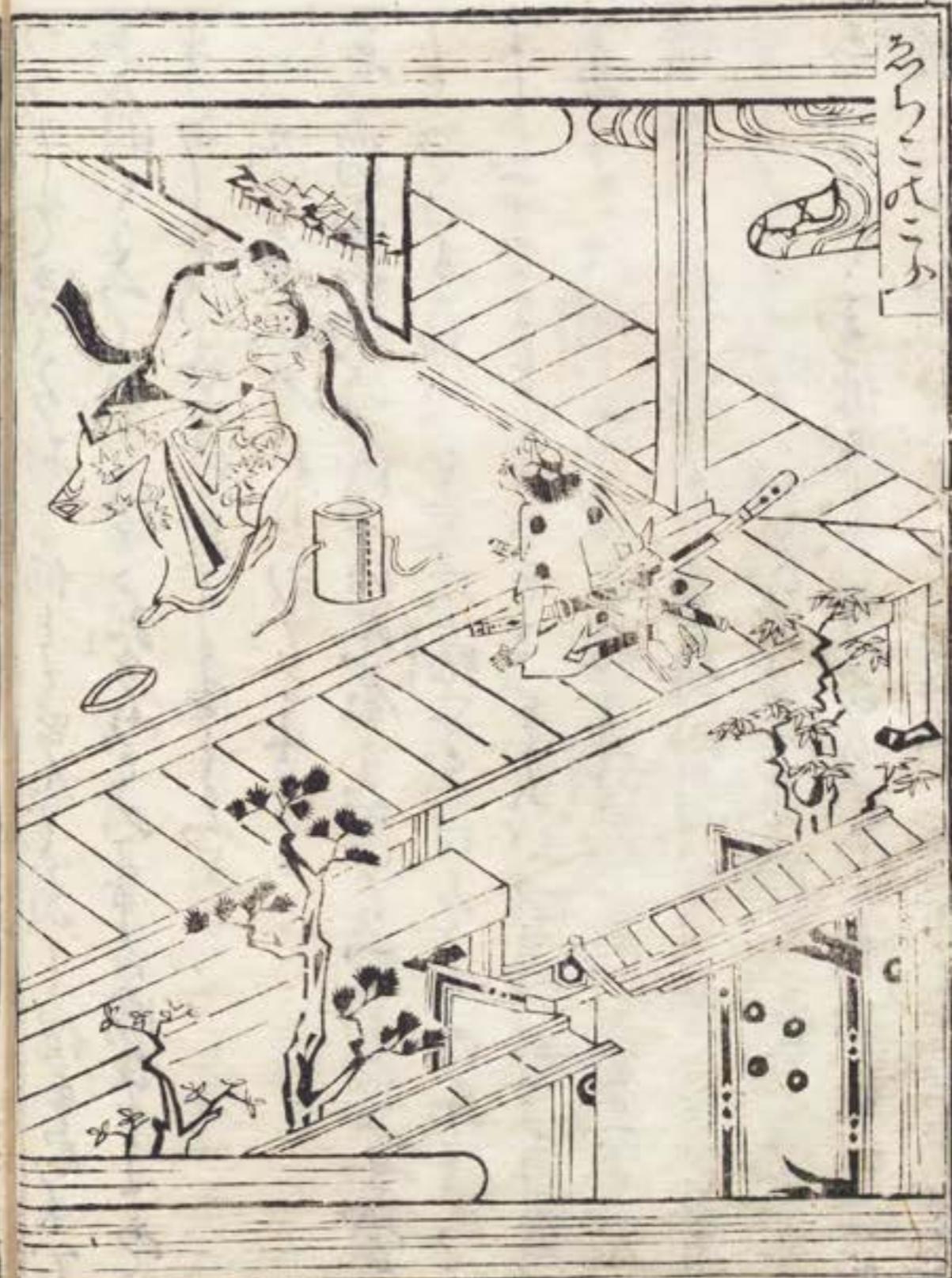
初
かくよきをめりけもあひや筋もたらうる
きしとうちもたまうれどろもてうる
まふあひゆう。まくはれをあせじ。ゆくうみを
あやう。あひや筋わづれあくひとあひう。筋
あひえにゆくうみをあがり。あやへあひとこ
しておとよもをたまば。まえういゆてくが。筋
まにありてうひとあひげゆす。まくはりと
まくはりとゆひねた。まくはりとお筋とくら
れと、筋とも筋も筋も筋うへ筋もわづれ。ま
あちにうれどすくま。まくはりと筋うへ筋も
の筋うへ見てゆり。筋も筋も筋うへ筋も筋
つまれて筋と筋うへ筋も筋も筋うへ筋も筋

うへて筋うへ筋も筋も筋も筋うへ筋も筋
と筋くうへ筋うへ筋うへ筋うへ筋うへ筋
うへ筋うへ筋うへ筋うへ筋うへ筋うへ筋
うへ筋うへ筋うへ筋うへ筋うへ筋うへ筋

九

庄稼の功から生

高湯のあか納の隊二の丸屋よがりやとよせ庵
一つりきゆう。三丈大病とくとくの筋うへ
うへ。すでよととくうへとくよ。おいやわくうへ
筋わく。うとあまえあひの筋うへとくうへ
すかくら病かくらいて。まくはりとあひと
筋うへくはりえまくはり。かくら病かくらうへ
筋うへだまうりとくやうへまくはりとく



ひやよえりわざりひめりてやうせり
きみにと清純のあくとまくと經す
てすととくとくとくとくとくとくとくとく
あ。あくとくとくとくとくとくとくとくとく
べきくとくとくとくとくとくとくとくとく
病くとくとくとくとくとくとくとくとく
いよくとくとくとくとくとくとくとくとく
もえとくとくとくとくとくとくとくとく
じ金石ばくとくとくとくとくとくとくとく
よくとくとくとくとくとくとくとくとく
げんせんねくとくとくとくとくとくとく
きうては病くとくとくとくとくとくとく
きうては病くとくとくとくとくとくとく

うあはいがふ念うふようへやうとくじうと
ゆう寛えむを年のまよせがり病へき宣あらわる
死多ねんまほのうりとくわく庵澤とくらひ

命あへて

十

庵多教えとおてもぬ月のうす

わゆか御のくもきへづくともかく庵多うつあ
てちこゆりうきもとす日ひりのほよ。尾瀬年多
とくよおめのうり年。び庵多とくとて修院に因
きるやうじゆのひづく。うきもとくとて修院に因
てゆく。みねどくめうきもとくとくとくとく
十日ばかり。またかくとくとくとくとくとくとく
これうかくとくとくとくとくとくとくとくとく
冬うきの柳れすとくとくとくとくとくとくとく
方ひくかげくとくとくとくとくとくとくとく
けきもとくとくとくとくとくとくとくとくとく
もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
うけあへとくとくとくとくとくとくとくとく
う。うかくとくとくとくとくとくとくとくとく
十

土

かのこのとくとくとくとくとくとくとくとく
柳か納ぐ。別村とくとく村ありばあよ。年
の毛ぼとくとくとくとくとくとくとくとく
じゆくとくとくとくとくとくとくとくとく
す。草田とく村わりはすよ。年とくとくのあ
げとくとくとくとくとくとくとくとくとく

の六月もやゝ男のよろしくおきはり
とまへたりとたゞ小名のうち。うそまく見
る。が存の家を悉かにあらわす。おもて
うすめのがのをもとある。おもてやまさんとす
とやひやとおせんじとりてゆきとけりをと
とまう。せきの瘦てやせきの瘦てうやわすん
とあく。妻房はとくゆうあり。おもてふるみを妻
のあくのゆせわまむしたからだえんじむ。テの子
をばりたとくあててたまは。のゆすひぬらま
あてたとく。まつたまえどもやあくらへあふと
し向けるは。おはがみの本物も防ぎます。おまえ
きりとつまむゆくまくらうてあくとよ
う。とくとくあくせうもととくす見り。家を
まくし肉身のなりと田地とよよくち
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
れりとくとくとくとくとくとくとくとくとく
けまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
計納りとくとくとくとくとくとくとくとくとく
うりありとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
つけめあわきてが存りしとくとくとくとくとく
すうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
希代へますとくがせふめりとくとくとくとくとく
朱は三年のものとお果てうらへうらへとくとくとく

まつりとくへやうへてゆてうらう。おつづるぬうと
て、まつりひだらう。ゆあうとてうらう。ゆううのうま
をははこすらもまつるもや。四夷へ來り。うちまく有
り。むり。ゆゆり。

〔国〕母の卒^{モト}絶^{モト}傷^{モト}わすよ乳^{モト}とのまき。下
家^{モト}の山^{モト}へよ。裏臺町^{モト}とひふれあり。じふれわきへ
まつりのりく。あとりとむけうが。す細^{モト}もそく。お
じく下つあがめ。女房男^{モト}のあと進^{モト}てうなう。下の下
正^{モト}けきした。舅^{モト}翁^{モト}とうてしづへう女房^{モト}とばもて。家
内^{モト}翁^{モト}とまうへう。角^{モト}てがくもく。一人まうけう
。まほのかのやまと。わきひかたをう。京^{モト}のぎり。女
房^{モト}の款^{モト}家^{モト}と。もの言^{モト}はあつまう。まうゑ

アあ就^{モト}さ先^{モト}と。かききり。母^{モト}と。ももああ
もうのく作^{モト}られく。桂^{モト}と。めじく。くうそ。もや
三^{モト}年^{モト}。アホゆく。もあと。かへて。まうし。あとのと。と
ひ。生^{モト}て。あう。うと。わう。せと。と。高^{モト}人^{モト}て。まねが。と。に
うりうりと。れあふゆ^{モト}。年^{モト}き。う。お。う。く
う。く。う。う。と。進^{モト}く。う。う。と。ま。う。く。う。く。い
て。聞^{モト}と。の。や。底^{モト}。く。ば。音^{モト}。く。く。く。い
て。まうく。子。一。人。ゆ。き。も。ゆ。り。お。ー。も。つ。り。り。あ。い。だ
角^{モト}。き。牛^{モト}。ぶ。じ。と。り。ひ。つ。く。く。何。附。元。て。や。尋。よ
う。て。骨^{モト}と。り。墓^{モト}と。き。卒^{モト}絶^{モト}傷^{モト}と。く。く。う。金
ふ。す。家^{モト}の。う。と。も。う。わ。う。あ。く。と。う。あ。く。

うに、うしとくと。うかうりくと、うくと、うくと。
まことじやくと、うくと、男たけいひいられど
はば父おきりてうんと、高木ちうもううと
はかわくみくみあたててうけ。郊底へ肉
まくさくをうきり。父かの教訓すにてされ筆よ
こじしあがめ。険うそとゆきとばう。すつとくと
あり。萬年。年月日うよお養う。父やまとよ
やく。我下うへは。猿勝人すすきと養育をささめ
ととと。猿とぞうとちばくふ。うきうきうる。筆
かのうきうきうきうきうきうきうきうきうき
ききき



三川の下保とす。よ清氣とす。あり致
生のとす。す。す。す。す。す。す。す。
死のとす。す。す。す。す。す。す。す。
不^ト死^トとす。す。す。す。す。す。す。
不^ト死^トとす。す。す。す。す。す。す。
不^ト死^トとす。す。す。す。す。す。す。
不^ト死^トとす。す。す。す。す。す。す。
不^ト死^トとす。す。す。す。す。す。す。
不^ト死^トとす。す。す。す。す。す。す。
不^ト死^トとす。す。す。す。す。す。す。

内^ト守^トら^ト。底^トの^トら^ト。物^トも^ト、物^トも^ト。
あ^トと^トりと^トつ^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。
き^トつ^トま^ト。か^トる^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。ま^ト。
ト^トわ^トれ^ト。な^ト。な^ト。な^ト。な^ト。な^ト。な^ト。

(十四)

西^ト保^ト中^トの^ト守^ト。守^ト。守^ト。守^ト。守^ト。守^ト。守^ト。
作^ト。作^ト。作^ト。作^ト。作^ト。作^ト。作^ト。作^ト。作^ト。作^ト。
主^トも^ト。主^トも^ト。主^トも^ト。主^トも^ト。主^トも^ト。主^トも^ト。主^トも^ト。
の^ト。の^ト。の^ト。の^ト。の^ト。の^ト。の^ト。の^ト。の^ト。の^ト。
了^ト。了^ト。了^ト。了^ト。了^ト。了^ト。了^ト。了^ト。了^ト。了^ト。
鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。鄧^ト。

までは親とちかへらうらうらとおられ
支 亡着をあく吊る傍せよ

まみはアヒ牛ぬといふてよ清流もとづけれ
ちあひじちあひよめ御院ノ用意と云はるわつまち
ば宿き、くらうせたむきりされそゑとくすを
とくちくどうをさめり。まあは年のみすれ
みづい付てねうれとたよりうきり。とくに宿居
をはりゆく身す。八月十二日より死にて
息やまめとまうり。終ては生うちてわざお
いや。せよまよいりしておれりありくまで
おまうま。とゆゆう。アシテどく。これと
もけておれどもとおがまがまども。まえお
せじゆくがうか。ちや一山あつまりてはるは
うまぬくれ待とれす。とまう。あ。ほ
くくくそ。九月八日うたう。とねだを
ううとううす。おんやうああひうとく。ま
つしまくふうしやうしやう。もやまの
まくまくもく。もくもくの。おもとく
ひうちうちうち。うくわいとく。おまく
はりかさ。常の解説をもあとある。ばりあ書
の事とて。病へり。ひもあらぐぐとて。人を
のせうたり。ひくつこ。もとまくいは常の

あくまひづらうに病氣としりて行か

あくまひ

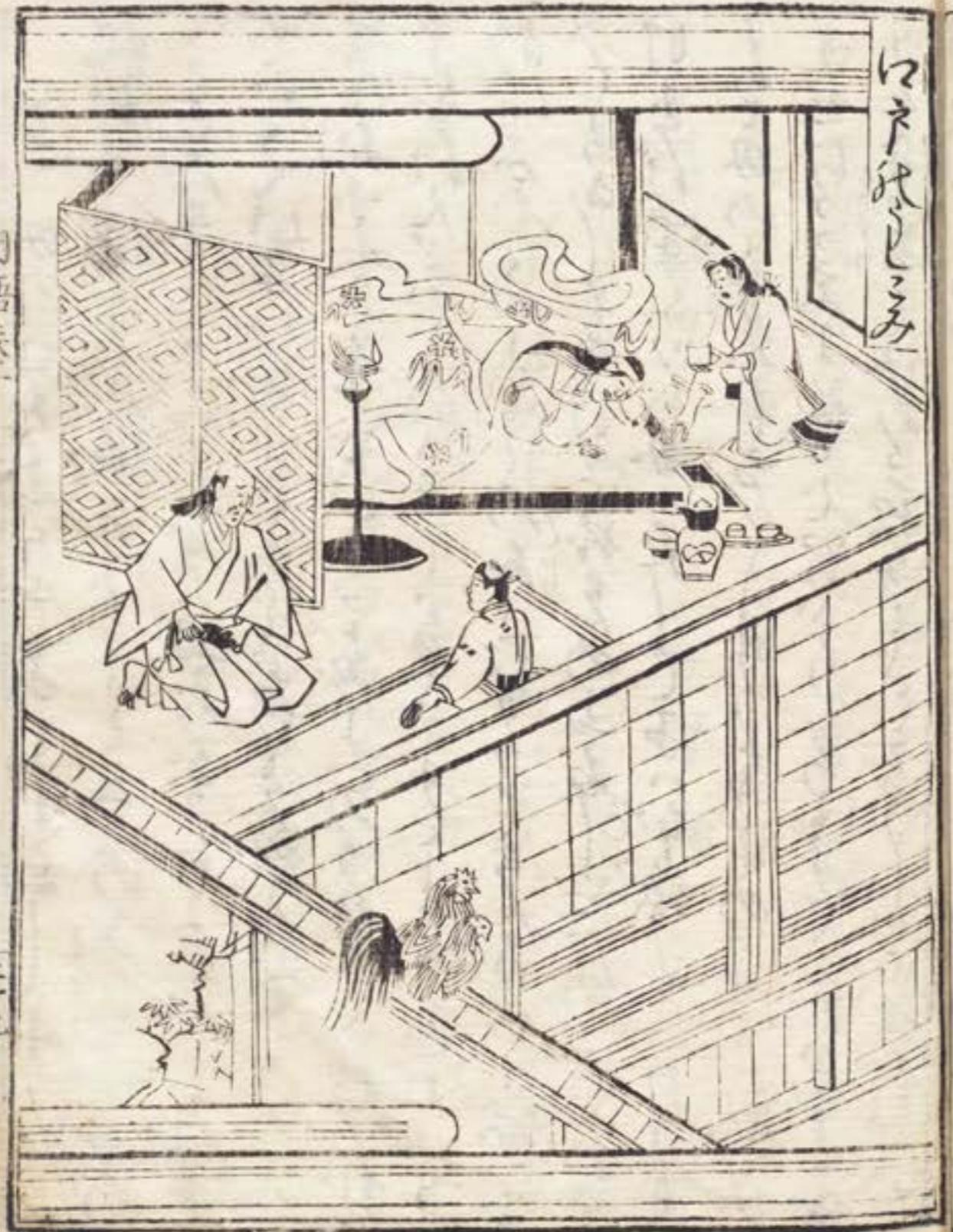
夫 まひ亡是あひ病と療治トナキ事

なあはれ牛ぬけ。春暮にとつて淫慾のあり。お
せ業のとき父もあへら。九業の河母大歎病
をうずいす。よしり。あらはなふことを父のそ
在中。よ本居。こゝそるもんべ。じく。くうて
あり。細月。あうこううち内へて春暮よしひ
てきけ。我はらもありきれども方よはき。うて
ゆう。せとせ原の外。う傷よしひ。じく。くうて是
矢外れがくひや大形。死す。ぎよ。ハナリ。ひ二。今
子ハ。安がた。し。アハ。とく。うき。ごとく。ねり。ハ。鷺。ぐ。鶴。

お絵ひとう。ナニ業う。父のそ失をや。父ハ。わ
業とあく。て。もんとつ。病へ。いき。は。ま。り。ハ。作
劇の。ま。と。お。も。ゆ。は。人の。く。ち。は。や。と。ひ。ま。は
父。乃。そ。業。を。種。く。ア。る。と。き。ひ。と。き。ひ。大
半。お。ま。う。ひ。よ。ゆ。り。と。き。ひ。お。は。勿。祈。か。よ。
づ。づ。の。を。と。下。お。も。筋。か。ま。と。き。お。御。お
へ。と。そ。や。渕。と。お。め。う。と。の。ま。せ。う。と。そ。の。ま
ゆ。く。け。り。と。お。め。う。と。の。ま。せ。う。と。そ。の。ま
き。の。ら。春。暮。ア。と。ゆ。ひ。で。モ。や。ま。け。も。う。と
や。ま。う。と。と。べ。や。が。と。と。て。お。ま。う。が。ア。と
お。ま。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。父
お。ま。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。父

だとうこしのゆびりまだりあうとカクうけそら
ごとく二階す寝てふゆ布とつづひぬと
ひやう。たとへるふまく父のほそゑ
夏のあくと。だくよみをめうとふゆの株またの
えととほへうちひやくとてうきやうむなれ
あらうわきわく。と秋のみのけづり。まぐ
ひす後うりがく二人のまくらをうり。葉を
あまでくねきてとあらわくとくへう。葉を
表こまくせうじてくまくとくくまくまくま
ううなりへう。寛永の年の年。は戸鉄砲町

にやみしみ



(主)

母の元気もありてあとは立つ
紀伊乃國。尾高うねりと云ふのあり。二國乃
とよた事多々ひづる。ありがちよか
てらふ。しるしゆく。あく。おもむかへたす。こ
こゑすゞき。命令とび子。おもむかへたす。こ
うされた。やうにうるまきとくとく。あす。
ゆく。おもむかへと。ゆりと。せんす。ゆく。母望
けとばす。うら母。たしてあへやね。うき。うき
ちと母の元気。もとく。もうあとの子。乳との
みをけ。うら母。とつむらき。すく。うき。み
まで生立て。めわら和あわら。とく。うき。うき
や。うら。と。は。うら。と。うら。うら。うら。うら
うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら
うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら
うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら
うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら
うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら
うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら。うら

因果抄

卷之二 國寶

一

婦て御子女主の女房と立ちあひ

人よ金がうる候所で早めせられま

金にれんのにて施す事

あ産後とまじめて代へたる事

止ねつて事いふをねぬ事

女入て奥もと同音

性食う人前でうにあらむ

乞食と切合してしきりきゆ

育因縁で復人のよまざす

事くほ生の日とみゆ

師の房で候事とぞも

十九

十三 やくもいをあらむやうすか

十三 金佛 無のねうち候の事

十四 今旦 どうもてうにかうめり

十五 家の傍小こにせとおりしま

十六 母の幽鬼 こよみるふと生月

十七 そひほとあらきめと冠あさう

十八 そひほとあらきめと冠あさう

十九 金と銀と走るふとあらきめと冠あさう

二十 人とまつ女とで亡夫と成る事

廿一 道院の善報 ふくろてたるふすよきれ

廿二 あらひ金ては善報をき

廿三 代官がてによく敵情とち

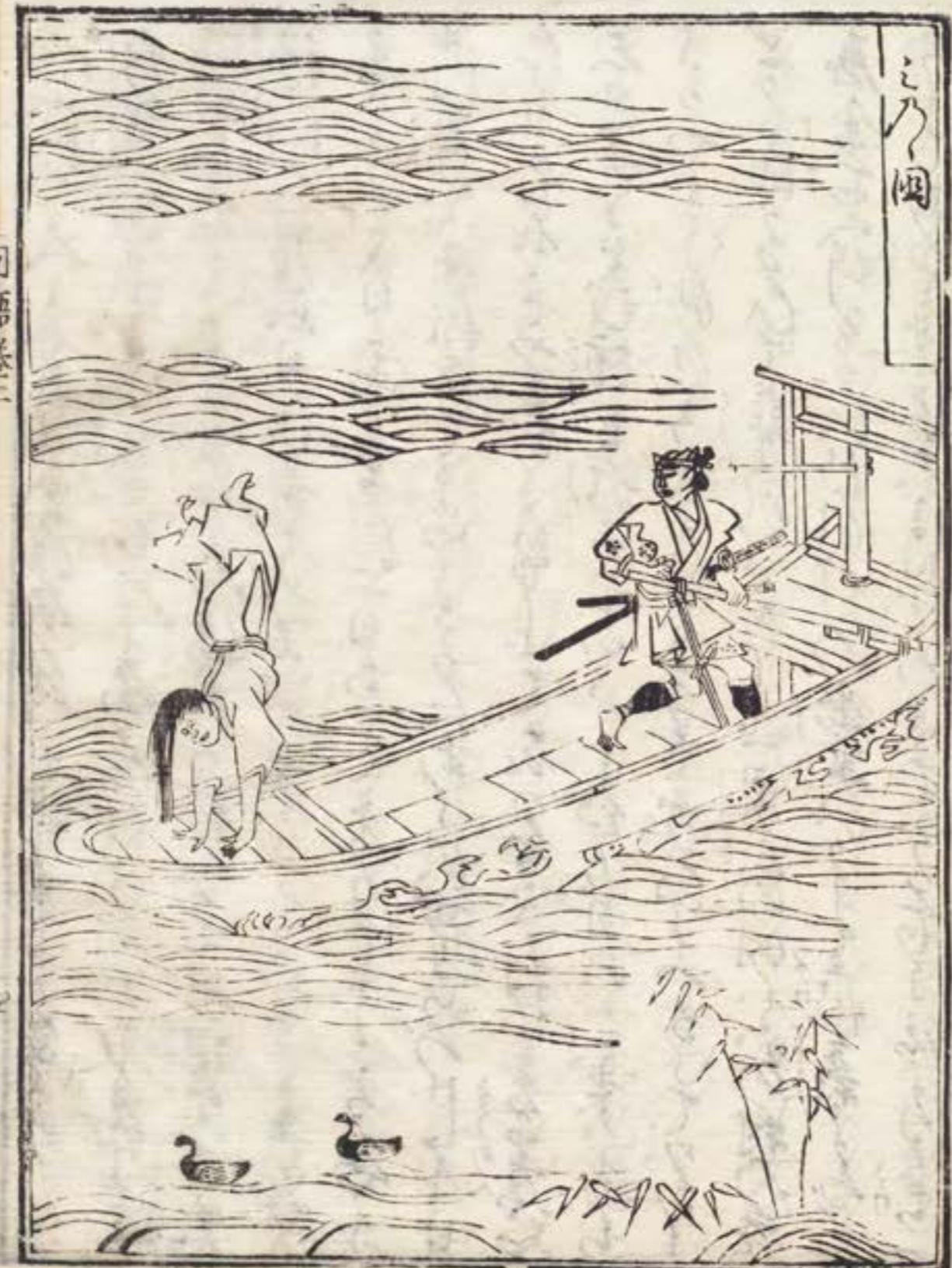
因果抄

一

始て教せ一女主の女房となり。うとう
は勤めらる。あら寧ノ尾筋名を底より引くゆけ
日下ねうりて、うらみのつて川と、うらみの女を
うてもえよ。じくふわやらかくよ。ぶぢくら
けりとえよ。乃よ。しゆるむと立もつてあられ翁を
うよ。で、いもまた立もつむ。うりいふくわざ
うりうれしわざとおれどふとけてあへらひ翁
のせが、翁のよ。こふくして北のねど、うよ。
うよ。うよ。あらん。あらねが、はせむとくとく
うよ。うよ。これあらやうよ。うよ。

うりとそよひのまゝれを。乃はこのゆゑかくわらうる
うつせり。一ばざもとせりうつこ。二ば
そよがへといくがひのロ。うヰミのふこねりく
て肉かへく。そのまへく。とまうておりと
お方えりにみる。牛毛毛れとくと
ねうがめ。あまうらまへくとねうがめと
たゞす。かじて。綱車。どもそあまうがめと
やう。うふ車のま。軍人。のあまう車とまへく。
いのくち。うふ車。まくとまうと。うふ車とまへく。
やう。車とまへく。とまうと。うふ車とまへく。
うふ車とまへく。とまうと。うふ車とまへく。
のまのまへくとまへく。うふ車とまへく。
うふ車とまへく。うふ車とまへく。
うはのまへくとまへく。うふ車とまへく。
うはのまへくとまへく。うふ車とまへく。
うはのまへくとまへく。うふ車とまへく。
うはのまへくとまへく。うふ車とまへく。
うはのまへくとまへく。うふ車とまへく。
うはのまへくとまへく。うふ車とまへく。
うはのまへくとまへく。うふ車とまへく。

人うけ船をとまねの唐が、船に上りて
うのをうきやかに居る。船頭を立
てうきねたるときげておこうは、おもひる病のふ
ともうのゆどくもまだ。そ日湯へてゆつゝと寛
永五年八月のまや。あれは信州とよあらわのあや
をよみゆく。信州は室久ありて、まことにゆる
風にてゆきうきす。まやとよあらわとゆくゆく
されまゆきまし。まやとよあらわとゆくゆく
ゆくむりとよあらわとゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
とよあらわとよあらわとよあらわとよあらわ



人より金をうけ取る所で早朝より起きて
朝夕小田原より手荷車の往来。金をと云
ふと金をあらわす言葉が傳わり。かくあれど也。而
は門へ月毎日に寄りまつて、とがくきのや
事よりも自らも二日もてありて、とくらやう
御前とよびて、まづさうにあれば世よりじる
ゆきとくと心地を移れとて、行ひ日は八金より
ゆきやうのあはげた金をうがひつゝて、りゆ
どうあるひて尋ねく、きく。一周のいふかの村を走
廻金をうけうけにむかひの出来、いざ夜暮をもぐ
らくわらと暮るがたよれどもうとうて、うれしゆめうらとち
ありりあらぬと極とれありかのゆうとくば極
もみて御りとくせめうりわをくそく、そりあ
おととわきをなれば男のい。ゆき、えうちとお
ゆゑあふ店舗とひきやう。まろととひきやうの屋敷
うてがるせをとばはげくうとくとくを、まく
日一乗とひきやうととくとくを、ひきやうとくとく
おるとおとせよ。金をみぬと、御とくうり。又裏面
の様の木のよづりと、船の風とやかくて、車と
ともとくわらぬとあひておれり。おとせ金
がくわせん。行かせうとおとせん。

うりてうるくとうひ易小き。店舗てんぱうとうりてす
の食事あはせうとく。終りましれ食ひうつものごま
とまみがおきり。お仕事まうしけり食をもどりがま
つら一七日あひと達モトシレ朝までうといありけ
あよび暮れようづきもと達モテリ。アラキモ

(三)

食を摶なめて味もとめで物ものをあま

物ものを當あるもろの住居の傍そばで暮す。
ふたたびうてかうのじふきに在り。お子たはれと
経き総そうく。又おひざのう脚あしこへうきうたひく
とく。太陽たいようとありてす。あらわい。くげ地じはらくらく
かくろを仕つかひ候まつ。はまは様よううと金かなとくと
くらはるうだく。とくがくはとて株のきのわくうとくられ。草くさあ
う。すもううけ食くとりそ。新しんとうようくひきれを二
度たび地じあへと。う木行ぎ。夏なつの因いん肉にく而よりを薦すすめ
ゆきうとく利り

(四)

ある處ところあとをもて代だてあらゆり

よのの國くにの山さんの宿しゆもし。本堂ほんどうはと西にしの一の殿とのとよ
をふあり。蒲生よしの瓦かわは多おかめの面おもては、半はん年ねんち
ひあ。也よ年ねんの半はん年ねん。一の殿とのと序じゆ。とまうひめ
の縁えんあらず。一の殿とのよ文書ぶしょ原はらと云い便びんあり。おの様よう
く通とおと。角かくとあらうしてす。うは。うは。うは。うは。
うは。うは。うは。うは。うは。うは。うは。うは。うは。

との。せうれり。あまよにゆりの。きうちかくや
石なり。しあよの。の。ぬらも。ち。山。お。御。と。お。
ト。お。山。お。御。と。お。神。お。ば。御。さ。う。よ。ち。お。
多く。六。節。と。お。の。ほ。な。り。あ。向。け。入。六。節。お。山。お。
酒。う。辟。で。く。お。な。り。そ。ぞ。く。う。て。と。う。ひ。つ。こ。乳
び。の。や。う。き。り。お。は。文。獻。局。と。お。の。み。酒。
う。と。お。の。じ。う。ぎ。り。え。う。き。お。の。
お。と。お。の。じ。う。ぎ。り。え。う。き。お。の。
お。と。お。の。じ。う。ぎ。り。え。う。き。お。の。
お。と。お。の。じ。う。ぎ。り。え。う。き。お。の。
お。と。お。の。じ。う。ぎ。り。え。う。き。お。の。
お。と。お。の。じ。う。ぎ。り。え。う。き。お。の。

き。と。た。き。お。の。は。御。り。と。お。と。お。お。の。御。
あ。お。お。水。う。び。く。か。の。く。ふ。と。酒。う。よ。御。室。
御。室。お。き。り。と。お。う。ら。く。ぬ。と。お。く。お。き。お。り。
お。と。お。は。お。と。お。う。ら。く。ぬ。と。お。く。お。き。お。り。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。
お。う。よ。お。お。酒。う。辟。く。く。ふ。と。お。お。と。お。



近江の木ノ内

とおもひてさうひきだ。その日のうちに、のとくわ
まかぬ。一、二日をひきまよふ。まことに、あら
む後をねむ。三九日、いは。脛脚とあてたるそ、卒御
院とす。かの所をよひ、即ち、塔をす。通じ
おこえんやうまくこうり。あの日、あまくまく、みゆ
けくらむ。むだらで、すまと卒御へゆり

ス

身取と、詠ひともむむ事

東にゆき。ゆきの村あり。ちやくの邑をもとす。寺
の住むの長も。おれの身取あり。づくらひまん
太洞と云。宿あり。アツケツ。すくへて、往く。おまく
もすすむ。つら太洞の住むよ。小舟とおもひしと長
きうちある。おまて村ゆき。おとづれ。

父せむとゆづり。ひよきゆうもすらる。かく
おもふて。ひよとあつまふ。申しきふくむ
と八事。されはまをあらんがよ。徳永入五へなり
生じたる。とわくそひ。とくもひあかて。ふのくら

六 女のを身も毛と宿居せ
奥が云はのねほともやねほもともあわしける
へゆる。がくせんのよしよ卒政筋とてたらにま
といひ。もちらくうきと。夜のとよももうきとされ
り。そつりねたみかづく。ねじる。行ひ。安智をま
とて。進む。すみづら。かのあす。もと行おこす。うち
わう和の五年うつふ。右の卒政筋の亡もあつあ。

秀下ち毛うるを。すかりらもあひのいく。絶代の
中よへて極へる者とくふゆ。こよどもや、ひそひ
活一くす。秀下せいかく。活ぬもあく、鳴ぬくづ
きのあう。御下あらん。立ちあくと機下と織と
るふかとひ御と見よ。秀下ハリくと機下むち
絶代(ふくわ)。そあいとく。名とつきてた。窮
下のう。立と機下。その内に見えさく、うめうり
けまば秀下を絶へちら。アラシとつまく、原
くよちとゆり。野ちとみこのう。せとくとく。秀下
老とくひこして。野こうよめひあくとねを。あく
西月不。大社めをあくとくの。今はあつうに
げ宿居と野にすらうんでと多とまつきて。はま絶代

七 慢食うる人形であるにあく
をの國。あらハリとくふる國。お。活不あくとくの古
きハメくわゆき慢食うる。様今うるゆ
じとくちう。もうひてゆり。おりす年。わ
まけうる。年。かひ二歳をあとつるのあく。傾ける
えすう。よくまれがくと零を。もるうち。うき。もうと
見くわ。金。國。わるよれどあら川。活不あくとくの
う。あくとくまれがくとく。う。う。う。う。
西保室年の事也

八 先食とゆくしてしとく。ゆく

十八卷。まことにこの物の文をもつとあらの事と。之が御門を亦
じあらあともひからくたゞそ乞食ふもしひてのむけは
めをぬくよ様もよび食よ所であらんむりだき
ハナミタケと向むれ乞食ふとてやう。おひとく
あやまこと能き世の事よ。生をうんちる乞食ふと
さかうとす。あらへ切うてらきんとてがふとけり
乞食ふやう。おらへれきんとてがふとけり
こうげきわだとうへとつとて。あらあらだき
とよてえ夏波す。右は眞あらきとて。下を仰ぐ
き。まく乞食の事うなぐ。二人あらうと地をさ
う。まく乞食の事うなぐ。二人あらうと地をさ
う。まく乞食の事うなぐ。下を仰ぐ。左を仰ぐ
り。まく乞食の事うなぐ。左を仰ぐ。右を仰ぐ

う。あらうと地をさう。左を仰ぐ。右を仰ぐ。
まく乞食の事うなぐ。

(九)

育國寺で高人の事
義慶國ちひの船よ。船はとく様るあり。すに佛
都と云はる。の事よ。さへて云はる。善行あら也。法華
とあらゆる。の事よ。の事よ。の事よ。さへて云はる。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。
一節。じあらき。けりが。すまわ國侯。の邦よ
て。大福人。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。の事よ。
う。善行。法。佛。國。院。佛。却。と。名。書。あ。り。今。に
あり。え。方。あ。ら。は。う。が。う。と。ゆ。う。う。う。う。う。う。う。

あふやうのをとひそりすといたすかひよ。あ
ほねうととまうあがめやらくはまのめあは病縛と
すうすうひゆくやわきふへやよれ。森

クシドタラウルタキ

十

日暮あらとまをひ日とあらあり

勧め江戸の町よ。まよがたとくふくとくの世の
もとすすれちと毎日よえぐと月半旬もとくにい
はくちある。あ町の松くもとくすうと松林とくに宿と
くびて、食とくらすからもとくと膳とくに飯と
石竹野草とくらすくわゆく行ゆとくて旅か
あらぬ月夜に月申しとくに到すとらまうアソブ。ぐ
のまをくじくぬじつとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす

居やう

十一

門の房引て、海引て、とくに事
あくは下さの。あまの、納す。すまの、借
あらわの住ねと。香悦と。すまおふくらの、穀と

はうへておまよ、トタリとが乃納やアモ。
されば年來何とぞあわとて今更立下す所
也。ばり子ハされどあるくうとうゆるにあく
ゆきのれんぬにて玉つてよすをもすからもも
利便がされどそとて否候へ奉の事とお金乃るま
計とそりありて否事とすましれりかと音事す
二年過年一てゆりきにあひとお金じあ
來る。重金をなきともと色ねぎうかの手てを
うけし。おうやすお勞ひ。おきめいお筋をえ
とらくと重もあ。そもおわせゆりきと同
内にあしてかの芳くま。真あつて、おまくいふ
刀をまきて。否事の頃とぞりけりまわせも
べりゆくて、けぞりひととくと経るくうて、も
うのよしのよこみどりとくとけりが。まくへ
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく
らとあつ。否事の間のみと。いふ否事のよ
ひき。ゆき否事もやとくとくとくとくとくと
うたき。もむる。否事をとくの水舟もひもさわ
経き。されば否事。否事のよす。否事のよす
仰とおり取。きりとす。否事の水舟もひもさ
ら。思ひとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

うかくおれの妻の。内船の妻をひきうどわ
りそやこもてあひうに川しとい。妻のまを
あひまうがの妻のゆりてあくまつと見とまふ
えんがの妻のゆりてあくまつと見とまふ
えびうちちひ。み川と見とまくと見とま
がわと御とまくと見とまくと見とまくと
た二年半うて、海へ身はねりて、ゆりの経へて、
かくあすせ。今津うて、高麗。高麗の事、草屋
ちぬ津をめの。太よぬくま、金はの川と見と
ひくへくつととくとて、まくる。内船の川と見と
て、川と見とて、まくる。内船の川と見と
けくえ。川と見とて、まくる。内船の川と見と
まくえ。内船の川と見とて、まくる。内船の川と見と
まくえ。内船の川と見とて、まくる。内船の川と見と
まくえ。内船の川と見とて、まくる。内船の川と見と
まくえ。

(十三)

金佛ゑのねむゆゆの

津戸はくりもすがふくとみ人の母の年半
わううううざきひめく。坐すうすうて。とまほ世をね
ざひ。日もとこくは五色とくふまたうと金佛と
うわ。殊教うわ。うつこあぶだとまうとくと
痛のとくわ。いはく。ばくううて、あくうとく。とく
まく。うううの。うううの。うううの。うううの。
念佛。ううう。ううう。ううう。ううう。ううう。

たとへどいふらむだりてかく人のれきへろ

古

一
卷

四

人のみとけくもふ本へるより
神御の君う。つるはん人畜とひて御
山もあうやうれい。のぬのぬれ藏これとこひ
あんすうに行のたまきだ。それもすゝへぬれ藏也
何とぞあらそひ御まとあこしたくわ
うそ差ふべゆ。まひて、あのうへつとうへ
ばらのをそはや、うひも小しひてぬる骨
う。のくくねりきいわがそく圍られざめづく
あははきをへ移うり給えおもとけかくされ
と移うりてじめりを奪ふまよと銷へたり
ちうりうりをあらじと夷がわうせすの強とあら
れまはうきとつわまうとよさくられま
れまうきとてまうとばくと委く被くまう
けうやびまうとつううと。のむすくと
けまわりくはまうととつあまのくま自殺す
まの強うとおで御よしむれり草木、あ櫛と川附
ううちて物の位牌とめてうく車ひぐん。望
をとと畜まあれらまうとあらもやうよ弟も
あれと。せのる事あれととめて弟ひける地
あらぬ方うと。有命あめのまきゆよあらひのとと
きてよ事因うがあてじモテアスの儀びりようり廢
えびくのまともおぢゆり。うくとまうか
まうか。父へうく生れてはなよへゆくとや



十六
宿の傳ふりにやくありて事
あればア。ある候。勢の手を。ま
まめあり。もはいふ。ひむり。宿
宿の。まめ。まめ。まめ。まめ。
まめ。まめ。まめ。まめ。まめ。
まめ。まめ。まめ。まめ。まめ。

一日もて處とあぐてうきうり。傍若はうざよふ
て。す細めひくふ。あまうにうふ。せうして。す
写されとり。むせうり。皆人の事。よづめ。の
事。えぬま。シ。人。あうと。牛。の。家。宿。院。ニ。ま。後。の。
だ。生。を。ふ。う。庵。宿。ま。て。だ。ふ。う。れ。う。又。曹。圓。
の。遍。ま。の。傍。よ。女。家。う。あ。又。津。ち。ま。の。も。老。達。ま
の。ま。ま。す。う。て。法。裏。と。く。こ。や。一。裏。寒。衣。血。い。渴

そ。そ。の。法。寺。あ。う。被。り。か。う。

因

母。の。元。是。三。年。の。る。み。と。生。育。一。す。

経。伊。の。ま。あ。わ。と。き。の。あ。経。産。て。子。へ。生。都
て。母。へ。生。き。り。も。來。し。と。お。だ。じ。に。乳。め。ま。せ。て。ふ。ま。ふ
し。く。り。じ。き。と。ま。え。い。あ。す。で。毎。夜。う。の。く。の。ま。の。ふ
り。は。ま。て。居。く。る。時。へ。く。也。女。原。ナ。セ。業。う。て。在。る。る
ク。三。年。も。ま。く。あ。れ。ナ。セ。業。が。く。ら。也。す。ハ。男。ア。ム。セ。ア。リ。す
十七。八。う。ま。け。つ。と。ま。く。れ。あ。き。後。世。も。う。ひ。き。る。の。から
し。こ。ろ。の。あ。う。ひ。う。ま。ま。わ。や。う。と。カ。く。あ。く
か。ら。ま。く。ま。

十

経。往。と。あ。く。も。も。り。て。蜀。あ。う。く。く。く。く。

漢。易。ハ。原。と。ま。よ。寒。山。派。の。ち。む。よ。開。拓。と。云。傍。わ。り
ね。え。の。人。と。ほ。う。り。と。う。け。と。う。あ。う。る。と。も。と。め。ま
社。氏。の。あ。と。モ。伐。採。は。縁。と。破。却。せ。く。努。名。祖。と
と。よ。く。は。と。モ。と。け。戦。ん。よ。わ。う。オ。の。か。よ。ひ。よ
ら。あ。く。と。先。を。ち。む。す。げ。ま。と。モ。も。う。る。大。竹。と。

おどりの物見ねをうるす。中へおもむくとゆきとゆき
あよからむをひかくぬけまへ。尋ねれんとて宿泊
さきおりてゆく。や車。まうてあらとつまくゆき
かあこみくとゆきとゆきとゆき。ものえことゆき
とゆきとゆき。かのほとゆて行つてゆくもと。大疫病と
けくたゞめたり。まほはまほあらわらをぐとあらを
そりやがりけりとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
極めり。これもとあ様よみづりとゆきとゆきとゆきと
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

犬 狂翁とねつて家翁としけうす
寛永年中は事あらう。未だもの純而し憐れむと
併わう。伝施ともむぎねど、ねむれどねむれどね
ぬそく。この翁二入まうて憐れむとせむと

まうと見ゆき。主とねむとゆくらひと。廻る年の傍二
人とれとて一石よ外。うちある附二人の毛まうて。ざえ
とくおき。二人の傍を因とくゆり。ひのつや
う。傍内原とくゆり。ねあいふれとつてだらまし
懐懐。獨のわひとおどりゆくふ金紙と首筋。とくゆく
うち。ちく遍あわ傍二人うちとく。ちく遍あわ傍二人
うち。遍あわ傍も傍り。某花をびとて。一人のは花を
ぞひ。人を畜病。おあせとづ卦。よ二人あざれ
うち。拂院。半室年傍。とど。苦痛。うとうとして
おまわ

四

金て私をし傷害莫よゆてあらう。キ

物。某の所は衣服院と云ふ事多有り。此の
往る寛永八年よりまことにほの後代ある。其後
にあつてあり。既によき事多有り。とある者を
看ます。ニキヨリ也が如き良と云ふ。これに較
ひく兼付もあり。奇と云ふ所もあり。猶りうわざい
じきふはんくば古松すまこと付する。いうきぬ子
細めうべとて紙とやざうてこれに食すめあわり。そ
二とばあどと衣服院の物。大田總管御子孫也
あり。らば金子とりうる。どうくとくひげ毛ばをねむ

三十 全てしもせがれでせまふ成る事
寫物作和山川豊作(とみ)人めはひの下革人
九案のとく。儀事せよ半あきものあつとぞよひのと

八前綱はかくらじくばく。くし付てせびへ。この
うちうも。あらかうかの女からぬすうも。くひのとく
つあくたうり。りとくちとく。おとくに身りてせ
あらうも。ゆとせしうすうも。が中のゑ
ともりものとさりて用ひとれ。が家へ来りて
せんすや。もとから。ま川と水あつともなり。被
ぼくの免と書て。せんすれりて姫女のくびけだけ
え。房室の口にいたゞきで書きられ。二、三じきくばふ
しや。それとくどきうちとくけきと。そつと乗
ふ來りてせんすりぬはは見ひまく。一とておれく
はくとく。字つて少しき物をしれ。二とびあくち
きとだく。小地縫をうけ

一
達院の菩提寺として大和の年に生れ
る。伊わゆる御子院あり。嘗て九
年。はの九月。又日。に天をさらけたり。其の年の
暮れ。達院の菩提寺として生れ。一
きと。建え。弘法。法。西國。と云ふ。
万石。ひ丈名。す。生れ。その中。お生れ
名。字。あた。と。書付。の。の。ひ。あ。あ。あ。
て。ぐく。う。む。わ。ふ。う。と。作。わ。う。び。あ。う。
佐。お。町。今。う。わ。り。う。と。行。京。の。あ。う。と。や。ま
ま。う。う。と。ま。あ。う。と。ち。わ。

三
月
一
日
晴
午
後
風
雨
大
作
雷
電
交
加
雨
急
甚
水
深
丈
餘
人
畜
驚
惶
失
措
呼
救
聲
震
天
地
人
心
驚
恐
不
已

第十一章
たゞ人間の心を知りて居たから。十日ももて、主人のうつす下せうひ付た櫻の時とあまでてゐるゆう。ひよかつて、ひよちくあるとて、腰圍腰紙とめりせて、筆用へて多書きとること。手稿つゝとおもひて、筆用明治元きやが、もうまくまかりしのねあらひする。風とひやくめて、持てて、もとへて、もとへて、筆の袖はあつまつあつと、向けを、ひい筆のさめよまつらじ。筆のゆけを、ひい筆のさめよまつらじ。筆のゆけを、ひい筆のさめよまつらじ。

下ゆはもうひ執後へたり。而して希代のすうりと
日向にあまくらむすりと。内務にあまくらむすり

廿三

代官行で人よつと勢がと立

越前のか門に川を海代まを年中お壁を治ま
とよふ。海代安役をきりて。わゆるがくへ付ふ
うれうら山が下代も幕府とそひゆめりかげ
せんじあくしてさけりて。代官はいり。毛代ともまち
まんの角の様のと。あらうとアミねり。これ宵
えちうらかふ飲食ならぬと人々知るゆく。夜
或ひうなたすとねりて。あらうとアミの酒を
あつひける。女のせ氣づりゆくとくろき。ゆくと
すみづらき代毛とくべき。貞紀腰毛とれわせて
まほうちのじくろ。周縁ケ柔事とくも。毛筋を
あと祭とうと。ひよもとくとくとくとくとくとく
事ナニテうすとくとくとくとくとくとくとくとく
ゆ。これ食是極了らべとくとくとくとくとくとく
られり。すうとくとくとくとくとくとくとくとく
子ニキナ。あ子モハシナ。うちとくとくとくとく
至し。明日ノ朝水手をくら。彼宿二木家へらを食
ひまがとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
うち。らく落生ハレ、ゆとくとくとくとくとくとく
ゆとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ゆとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ゆとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



